

モーセに優る御子・第二の警告

## ■前回までの概観と今回の内容

1. 著者と読者： 著者は、誰かは特定できませんが、第二世代のユダヤ人信者です。読者は、エルサレムに近いユダヤ地方の諸教会に集う第二世代のユダヤ人信者たちです。
2. 執筆の時期： 紀元 64 年から 66 年の間と推定されます。紀元 66 年はユダヤ人たちがローマ帝国に対して反乱を起こした年で、その反乱は 4 年後の紀元 70 年、エルサレム陥落、110 万人のユダヤ人の死によって終わります。
3. 時代の背景： 手紙が書かれた時期は、反乱勃発を前に、ユダヤ社会の異分子である教会に対して迫害が激化したころです。動揺した信者たちの中には、いったんユダヤ教に戻りエルサレム神殿の祭儀に参加して迫害を避けようという妥協案が出てきました。
4. 手紙の目的： 動揺するユダヤ人信者たちに向けて、著者は、ユダヤ教の三本柱である「天使」「モーセ」「レビ族アロンの家系の祭司による神殿祭儀」と比較して神の子であるイエスの優位性を教え、ユダヤ教に戻るなら、エルサレム陥落に巻き込まれて肉体の死というさばきを招くと警告するために、この手紙を書きました。
5. テーマ (1:1~3)： 著者は、あいさつ文なしで、冒頭から本題に入り、中心テーマを「御子の優位性」と示しました。緊迫した時代の雰囲気を感じられました。
6. 天使に優る御子 (1:4~2:18)： 三本柱との比較は、まず天使についてです。御子は、神であり同時に人であるお方「神・人 (God-Man)」です。
  - (1) 神であれば、天使よりも上であるのは当然です。この点は、旧約聖書から 7 か所を引用して証明されました。
  - (2) 人としての立場でも御子は、十字架の死を経て天使に優るお方とされました。この点は、メシアの王国での統治権とメシアによる救いという二つの観点から説明されました。
  - (3) この教えの途中で、第一の警告が語られます。第一区分の神学的理論は始まったばかり、まだ第一の比較「天使」を教えている途中ですが、そこまでに語ったことだけでも、御子がどれほど優れたお方かがわかるので、信仰を見失うことのないように、という警告です。
7. 今回は、ユダヤ教三本柱の二番目「モーセ」との比較です (3:1~6)。モーセは、神の家(神の民)であるイスラエルの中であって、神の家のためにつかえた忠実な「しもべ」です。これに対して、御子は、家を建てたお方、また、「子」としてその家の「主人」であり、相続者です。ゆえに御子はモーセに優るお方です。
8. ここで著者は、第二の警告 (3:7~4:13) を述べます。前半は、荒野の旅 40 年の歴史を引いてモーセに反抗した民が荒野で死んだことと読者たちの現状を重ね合わせて、まして御子を否定するなら肉体の死というさばきを受けると警告、後半は神の安息に入るように、という勧めです。

## ■モーセに優る御子 人格と業績における比較 (3:1~4)

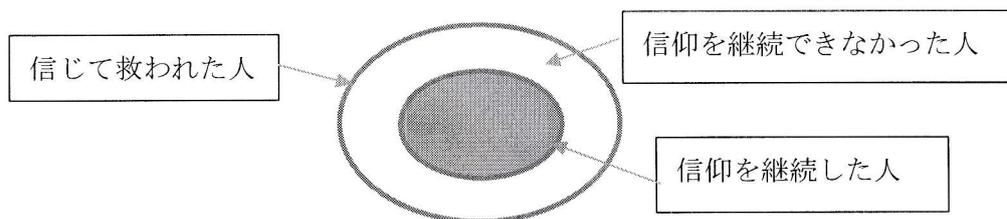
1. 「そういうわけですから」: 御子が天使よりも優ることについてわかったら、次は・・・  
ということで、モーセとの比較、そしてアロンとの比較に移る
2. 「私たちの告白する信仰の使徒であり、大祭司であるイエスのことを考えなさい」
  - (1) 新共同訳「わたしたちが公けに言い表している使者であり、大祭司であるイエスのことを考えなさい」
  - (2) 直訳「考えよ、使徒と大祭司を・私たちの告白の、イエスを」
  - (3) 「考える」=しっかりと見つめて、注意深く学ぶ。著者は読者であるユダヤ人信者たちに、エルサレム神殿での祭儀の方に向くのではなく、メシアなるお方がどうい  
うお方か、注目するように勧める。
  - (4) 「使徒」=遣わされた者
    - ① 御子は父なる神によって遣わされた (ヨハ 3:34)。この点では、御子はモー  
セに似ている (出 3:10)。
    - ② 使者は神のメッセージを伝え、新しい時代を開く。モーセによって、シナイ契  
約 (モーセの律法) が成立し、律法の時代が来た。イエスによって、新しい契  
約が成立し、恵みの時代が来た。
    - ③ 使者は、神の代理人として、人の前に立つ。
  - (5) 「大祭司」: 大祭司は、人を代表して、神の前に立つ。この点では、御子はアロン  
に似ている。
  - (6) モーセとの比較は 3:2~6 で、またアロンとの比較、さらにアロンに代表される  
レビ族アロンの家系の祭司職による神殿祭儀制度との比較は 4:14~10:18 で論  
じられる。
  - (7) 「私たちの告白の」
    - ① ユダヤ人信者たちは、公けに彼らの信仰を告白した。それが、メシアを拒否し  
て十字架にかけた民族的罪から当時の世代のユダヤ人が個人的に離れる手段。  
「公けに」とは、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けて、教会の  
交わりに加わること。
    - ② 信仰告白の内容は、「イエスはメシア、キリストである」(使徒 2:36~38、3:  
17~23、ヘブ 4:14、10:23)
    - ③ この手紙の読者たちはユダヤ人信者たち、すでにイエスをメシアであると告  
白していた。彼らは、次には、イエスを「私たちが告白する使徒であり大祭司  
であるお方」として考えるように、勧められる。その前提は、御子はモーセよ  
り、またアロンより優るお方であるという理解。
3. 2 節直訳「(イエスは) ご自分を立てた方に対して忠実である、同様にモーセは神の家  
全体の中において」
  - (1) 「神の家」=イスラエルの民
  - (2) 「ご自分を立てた方」=父なる神 (1:13)。イエスは父なる神に対して忠実である。  
(イエスは決して失敗しなかった。)

- (3) モーセも忠実であるが、イスラエルの民全体の中であって彼のわざにおいて忠実であった。(モーセは時には失敗した。出4:10~17、出4:24←創17:10~14、民20:1~13)
4. 3~4節 家を建てる者は、その家よりも優る
- (1) 2節で、モーセは神の家、イスラエルの民の中にいる。その一員である。
- (2) 家よりも、家を建てる者が榮譽を持つ
- ① 家は誰かが建てる。すべてのものを造ったのは神である。
- ② 万物は御子にあって造られた(1:10、コロ1:16)
- ③ よって、イスラエルの家は、御子が建てた。イエスは、その家を建てた。
5. 従って、イエスはモーセよりも大きな栄光を受けるのにふさわしいとされた。

■モーセに優る御子 地位における比較(3:5~6)

1. 5節直訳「そしてモーセは、確かに、忠実であった、神の家全体の中で、しもべとして、後に語られる事々を証言するために」
- (1) 「しもべ」:**ギ**セラポン、「病気や傷を癒すために仕える者」の意味。モーセは、イスラエルの道徳的・霊的な必要のために仕える者であったことを指す。
- (2) しかし、モーセの任務は、メシアの任務に比べると、予備的・準備的である。→「後に語られる事々を証言するために」:メシアに関して証言するという意味。
- ① (補足)モーセは、メシアの到来を預言し(申18:15)、イエスのみわざの証言者である(マタ17:3)。また、イスラエルを道徳的・霊的に真に癒したのは、メシアの十字架上の死である(イザヤ53:4~6)
2. 6節前半直訳「キリストは、しかし、子として、神の家の上から(忠実に治める)、私たちがその神の家である」
- (1) モーセは、神の家の中で、しもべであった。
- (2) イエスは、神の家の上であって、治めるお方である。
- (3) この神の家とは、今や(手紙が書かれた当時)、ユダヤ人信者たちである。
- (4) モーセはしもべ、イエスは「子」である。子であるゆえに、彼は家のオーナーであり、この家の相続人である(1:5)。
3. 6節後半直訳「もし、私たちが、確信と、希望による誇りとを、終わりまで、しっかりと、私たちが持ち続けるならば」
- (1) この箇所をもって、人が救われるのは、信仰を最後まで持ち続けた場合のみであるとすると、救いは人のわざによって獲得されることになる。それは、「救いは信仰を通して恵みによる」という聖書の明白な教えと合わない。
- (2) 「もし~ならば」と言われていることのポイントは、信仰を継続することは、その人が本当に信じたという証拠である、ということ。
- (3) 信仰を継続することができなかつたとしても、それだけでその人が救われていなかったとは言えない。本当に信じて救われたのだが、信仰を継続できなかった人は、「信じたことの証明を持たない」というだけである。

- (4) 救いは、人のわざでは得られないように、人の行いでも失われない。信仰の証明を持たない人は、救いから落ちることはないが、祝福や褒賞を受けることはできない。



■第二の警告 不従順に対する戒め：①旧約聖書からの教訓（3：7～11）

1. 7節「ですから」 御子はモーセよりも優るお方であるとわかったら
2. 7節「聖霊が言われるとおりです」
  - (1) 著者はここで、詩篇 95：7～11 を引用する。
  - (2) ダビデが歌った詩であるが、聖霊がダビデを通して語られた（Ⅱテモ 3：16）
  - (3) 神のことばは生きていて、昔書かれたことばであっても、今聞く私たちの内側で生きて働く（→4：12）。聖書を学ぶことは、神の力を受けることである。
3. 8節「荒野での試みの日」とは、荒野の旅 40 年間を指す
  - (1) 「荒野での試みの日」＝詩篇 95：8～9 にある 3 つのことを、凝縮した表現
    - ① メリバでのときのように（詩 95：8）メリバ＝争い
    - ② 荒野のマサでの日のように（詩 95：8）マサ＝試み
    - ③ あのとき、あなたがたの先祖たちは、すでにわたしのわざを見ておりながら、わたしを試み、わたしをためした（詩 95：9）
  - (2) 民が水を求めてモーセと争った事件が 2 回起きた。
    - ① 「荒野のマサでの日のように」＝出 17：1～7・・・荒野の旅の 1 年目
    - ② 「メリバでのときのように」＝民 20：1～13・・・荒野の旅の 40 年目
  - (3) 「試みる」とは、神のわざをすでに見ておりながら、それでも神を信頼せず、神がないかのような態度をとったり、さらにしるしを求めたりすること
    - ① 「主は私たちの中におられるのか、おられないのか」と言って、主を試みた（出 17：7）
    - ② エジプトと荒野で、わたしの栄光とわたしの行ったしるしを見ながら、このように十度もわたしを試みて、わたしの声に聞き従わなかった者たち（民 14：22）
    - ③ わたしを試みて証拠を求めた【直訳：わたしを誘惑して、わたしをテストした】（ヘブ 3：9）
4. 8節「御怒りを引き起こしたとき」【直訳：その・怒らせること・において】
  - (1) 荒野の 40 年間の中で、神を決定的に怒らせて、定冠詞付きで「その」と言われるような事件は、カデシュ・バルネアでの出来事（民数記 13～14 章）
  - (2) この事件により、出エジプトの世代（エジプトを出国したときに 20 歳以上の者たち）は、ヨシュアとカレブの二人を除いて全員が、荒野で死んで、約束の地に入る

ことはできなかった。

- (3) この裁きは、霊的な救いを失うことではない。約束の地に入ることなく、荒野で肉体が死ぬというさばきである。
  - (4) 出エジプトの世代の中にも、救われた信者は存在する。モーセも、アロンも、ミリアムも荒野で死んだが、旧約の聖徒として、彼らもまた「恵みにより信仰を通して救われた」信者である。
5. 9節「40年の間」：荒野の旅40年を指すが、イエスの十字架からやがて40年になるという時期に書かれたこの手紙の読者たちには、荒野の40年と自分たちの40年が重なって見える。
  6. 10節「その世代」：出エジプトの世代が神の怒りを引き起こした。「彼らは常に心が迷い」：迫害の中で動揺する自分たちの姿が重なって見える。
  7. 11節「わたしの安息に入らせない」＝約束の地に入らせない
    - (1) 約束の地は、イスラエルの民にとっては敵との戦いが終わる安息の地(申12:10、ヨシュア21:44)
    - (2) 出エジプトの世代は、約束の地に入ることなく、荒野で死んでいった。神の怒りを引き起こした結果は、約束の地の外側で肉体の死を遂げるということ。

■第二の警告 不従順に対する戒め：②教訓の適用(3:12~15)

1. 12節「生ける神から離れる」：離れる=ギアピステーミ 英語の apostasy 背教の語源自分だけでなく他の人も扇動して、何かをやめる・捨てる、何かに対して反抗すること
2. 13節「励ます」：ギパラカレオウ そばに来て助ける
  - (1) ヨハネ14:16「助け主」ギパラクレートス 聖霊は、信者のそばに来て助けてくださるお方
  - (2) 同様に、信者は、互いにそばに来て助け合う。特に苦しみの中、そして信仰生活で後退しているとき。
3. 13節「罪に惑わされて」 12節の背教の罪を指す。兄弟たちの中に、もし信仰から離れて背教の方に向かう者を見たら、そばに行ってその兄弟を助ける。この罪は、惑わし、欺きである。信者たちをだまして、あたかもその方向が賢明で、自分たちの現在の状況の中では最善の選択であるかのように思わせるからである。かたくなな心を解毒するのは、信者たちが互いに励まし合うことである。
4. 14節直訳「なぜなら、私たちはキリストにあずかる者となっているのです、もし最初の確信を終わりまでしっかり保つならば」
  - (1) 「なぜなら」ギガル：互いに励まし合うことがなぜ必要か、その理由を説明する
  - (2) 「私たちはキリストにあずかる者となっている」 完了形、すでになっている。私たちはキリストの一部、キリストと一体になっており、キリストのからだに属する者である。だから、励まし合うのである。
  - (3) 「もし・・・なら」：この箇所は、救いの条件ではない。私たちは信じたときに、すでにキリストにあずかる者となった。第三者が見て、そのことがどうしたらわか

るのか。それは、信者が信仰に最後まで堅く立つこと。

- (4) 信者は信じたときにすでにキリストにあずかる者である。それを証明するのは、最後まで信仰を続けること。その証明を持つ者には、御国での褒賞が与えられる。

■第二の警告 不従順に対する戒め：③教訓の解釈 (3:16~19)

1. 3つの質問

- (1) 16節 誰が、御怒りを引き起こしたか=神がエジプトから救い出した人々  
 (2) 17節 誰を、怒っておられたか=罪を犯して、しかばねを荒野にさらした人々  
 (3) 18節 誰を、神は安息に入らせないと誓われたか=不従順な人々

2. 結論 19節 彼らが、安息に入れなかったのは、不信仰が原因である

3. 聞いていながら、神の怒りを引き起こすまでの段階

- (1) 不信仰がいきなり、神の怒りを引き起すのではない。段階がある。  
 (2) 不信仰の次は、不従順になる。神に反抗的になるのである。  
 (3) 反抗者は、やがて具体的で明白な罪を犯すようになる。それも不注意や過失で1回、2回と犯してしまう程度のものでなく、意図的に継続して犯す罪である。荒野の40年間、彼らの罪は続き、その結果、彼らの肉体は荒野に倒れていった。

4. 「御怒り」は、神がエジプトから救い出した人々に対する怒りである。彼らが、神の栄光とわざを見、また神のことばを聞いておきながら、不信仰⇒不従順(反抗)⇒罪を犯したことに對する神の怒りである。その結果は、17節「しかばねを荒野にさらす」という肉体の死、18節「わたしの安息に入らせない」という祝福の喪失である。

- (1) このさばきは、靈的な滅び、救いを失うという裁きではない。  
 (2) 約束の地は、安息という祝福の地である。救いを意味する場所ではない。

■第二の警告 信仰の安息についての論証 (4:1~10)

1. 1節 安息に入れなくなる危険

- (1) 「こういうわけで」3:17~19で述べたことを受けて、イスラエルの民が約束の地の安息に入ることに失敗したのと同じように、読者の信者たちにも今、危険が迫っている。  
 (2) 「神の安息に入るための約束はまだ残っている」  
 ① 「安息」ギカタパウシン=活動を停止する、完成する、休む  
 (3) 「恐れる心を持つ」：誤った決定をするなら、それによる結果があることをわきまえる⇒神を恐れる

2. 2節 荒野のイスラエルと同様、この手紙の読者たち「私たち」にも弁解の余地はない。はっきりと示された福音を持っている。

- (1) 荒野のカデシュ・バルネアでは12人の斥候たちの報告を受けて、イスラエルの民は誤った決定をした。読者たちは、十二使徒たちのメッセージを受け取った。彼らはそれをどう扱うか。  
 (2) 「それを聞いた人たちに、信仰によって、結びつけられなかった」：神の祝福を受

け取るためには、信仰を保持することが必要である。祝福は救いに伴うものである。救いは信じたときに受け、失われることはないが、祝福は信仰を保たないと失われることがある。

3. 3節「信じた私たちは安息に入る」
  - (1) 「信じた」は過去形、「入る」は現在形。「信じた私たちは、今、現在、安息に入りつつある」
  - (2) この「安息」は、約束の地に入ることではない。著者は3節で、次に詩95:11を再び引用するが、合わせて「みわざは創世の初めから、もう終わっているのです」と述べて次に、創世記2:2を引用する。
4. 4節＝創世記2:2の引用 天地創造の安息
  - (1) 創2:2 わざの完成、すべてのわざを休まれた
  - (2) 天地創造の安息とは、すべてを完成したので、わざを休むこと
  - (3) この安息は、靈的には、「贖いの安息」の型である。メシアは贖いを完成して、今は父なる神の右に座しておられる。座するというのは、わざを完成して、休んでおられるということ
5. 5節「決して彼らをわたしの安息に入らせない」＝再び詩95:11の引用
  - (1) 神は、この安息を天地創造以来、持っておられる
  - (2) 神は、詩篇95でダビデを通して、荒野の「彼ら」すなわちカデシュ・バルネア事件を起こした出エジプトの「その世代」のイスラエルには与えない ⇒ 将来の世代にはそれが準備されている、ということを宣言しておられる(6節)。
6. 6節
  - (1) 「前に福音を聞かされた人々は、不従順のゆえに入れなかった」：出エジプトの世代は、不従順、不信仰のゆえに、安息の地に入れなかった。
  - (2) 「神の安息に入る人々が残っている」 直訳「それは残されている、誰かに、それに入るように」
7. 7節「きょう」：かつての荒野のイスラエルについて言えば、カデシュ・バルネアの時と場所、ここでのユダヤ人信者たちにとっては、紀元70年を目前にした今
8. 8節ヨシュアは、民に靈的な安息は与えなかった。これはメシアを通してのみ来る。
9. 9節「安息日の休み」ギサバティスモス
  - (1) 安息日そのものを指すのではなく、安息日の祝いや喜びを意味する。
  - (2) 新約聖書でこの用語が使われるのは1回だけだが、教会初期の文献には見られる。この用語の強調点は、「仕事をしない」ということではなく、「神が人々の中において人々の生命を維持してくださる、そのような神の臨在を、何にも妨げられることなく感謝し、ほめたたえることのできる機会」にある。
  - (3) 理想的な安息：いつでも、どのような状況下でも、神によって提供される安息
10. 10節 信者が靈的に成長すると、サバティスモスを持つことができる
  - (1) 神がご自分のわざを終えられたように、信者も自分のわざを終える＝神に信頼して、神がいかなる状況も通過させてくださると信じて、平安でいること

- (2) 「神の安息に入った者」、に入った=過去形、著者は、ある信者たちはこの理想的な安息に入ったと言っている。

【新共同訳】なぜなら、神の安息にあずかった者は、神が御業を終えて休まれたように、自分の業を終えて休んだからです。

- (3) この霊的な安息には、神が提供する安息に向かって「進むこと」によってのみ、入ることができる。「進む」とは、不信仰にならずに神を信頼し続けることである。

#### ■第二の警告 安息に入ることの勧め (4:11~13)

1. 11節「力を尽くして努め」<sup>ギ</sup>スパウダゾウ 「スピードを上げて進む」の意味、ここから努力する、勤勉であるという意味になるが、こつこつとやるということではなく、緊急性を意識して、早急に取り組むというニュアンスをもつ用語
  - (1) 神が提供する安息に向かってまっしぐらに、できるだけ早く進む。押し出していく。
  - (2) 神の安息に入るということは、霊的な成熟をもたらす。これは、信者がキリストのさばきの座に立つ日のために備えをすることになる。その日に不信仰は見つからずに済むものではない。私たちの問題点は、さばきの座において神のことばによって、ことごとく切り出され、焼き尽くされる。その神のことばについて、12節に続く。
2. 12節 神のことばについて5通りの表現
  - (1) 生きていて：生ける神から発せられた神のことばは、神のご性質の幾分かの部分である。霊的に死んでいる罪人を霊的に生きるものとすることができる。
  - (2) 力があり：<sup>ギ</sup>エナルゲス 英語のエネルギーの語源。コロ1:29にあるように「内側で働く」。道徳的にも霊的にも動力源。人を変える力を持つ。
  - (3) 鋭い：鋭敏な性質を持っている。神のことばは剣に例えられる (エペソ6:7)
  - (4) 刺し通す：貫通力、透徹力を意味する。魂と霊は人間の非物質的部分の2つの不可分の部分、それを切り分けるほどに貫徹していく。
  - (5) 瞬時に判別する：識別力、判断力
    - ① 「考え」：人が考えていること、その内容
    - ② 「はかりごと」：人がなぜそれを考えているのか、その動機
3. 13節 人は、いつの日か、神の前に立って、すべて隠されていたことが明らかにされ、説明を求められる。

#### ■本日の学びの結論

1. 信者はキリストの裁きの座に立つ (ロマ14:10~12、IIコリ5:10、Iコリ3:12~15)
2. さばきの対象は隠されたこと (ロマ2:16) ⇒神の前に明らかにしておく (Iヨハ1:9)
3. 「自分をさばくなら、さばかれることはない」 (Iコリ11:31) ⇒安息、霊的成熟

「きょう」、神の安息の中に急いで熱心に求めて入りましょう